

報恩抄

御文①

御書新版……238頁 12行目〜239頁 1行目
御書全集……312頁 9行目〜15行目

これらの文のごときは、日蓮この国になくば、
仏は大妄語の人、阿鼻地獄はいかで脱れ給うべき。
去ぬる文永八年九月十二日、平左衛門ならびに数
百人に向かつて云わく「日蓮は日本国の柱
り。日蓮を失うほどならば、日本国のはしらをた
おすになりぬ」等云々。この経文に、智人を国主
等、もしは悪僧等がざんげんにより、もしは諸人
の悪口によって失にあつるならば、にわかにく
さおこり、また大風ふかせ、他国よりせむべし等
云々。去ぬる文永九年二月のどし同土戦いくさ、同じき
十一年の四月の大風、同じき十月に大蒙古の来り
しは、ひとえに日蓮がゆえにあらずや。いおうや、
前よりこれをか勘んがえたり。誰たれの人か疑うべき。

現代語訳①

これらの経文のとおりなら、日蓮がこの国にいなければ、仏は大うそつきの人であり、阿鼻地獄からどうして逃れることができるだろうか。

文永8年（1271年）9月12日、平左衛門尉頼綱とその配下の数百人に向かつて、私は「日蓮は日本国の柱である。日蓮を亡きものにするようなことがあれば、日本国の柱を倒すことになるのである」などと言った。

先の経文に、「智慧のある人を、国主らが、悪僧らの讒言や人々の悪口によって罪に処するなら、たちまち戦が起こり、また大風が吹いたり、他国から攻められたりするだろう」などである。文永9年（1272年）2月の北条氏の中での争い、同11年（1274年）4月の大風、同年10月の大蒙古の来襲は、ただただ日蓮を迫害したからではないか。まして、このことは前々から予言していたことである。誰が疑うだろうか。

御文②

御書新版……240頁 11行目～16行目
御書全集……313頁 18行目～314頁 4行目

当世日本国には「我も法華経を信じたり、信じたり」。諸人の語のごときんば、一人も謗法の者なし。この経文には「末法に謗法の者は十方の地の土、正法の者は爪上の土」等云々。経文と世間とは水火なり。世間の人云わく「日本国には日蓮一人ばかり謗法の者」等云々。また経文には天地せり。法滅尽経には「善者は一・二人ならん」、涅槃経には「信ずる者は爪上の土」等云々。経文のごとくならば、日本国はただ日蓮一人こそ「爪上の土」「一・二人」にては候え。経文をや用いるべき、世間をか用いるべき。

現代語訳②

現在の日本国では、人ごとに「私も法華経を信じている」「私も信じている」と口にしてゐる。人々の言葉のとおりであれば、一人も謗法の者はいないことになる。

ところが、この涅槃経の経文には「末法の時代では、謗法の者は、十方の世界の大地の土のように多く、正法の者は爪上の土のように少ない」（趣意）とある。経文で説いていることと世間の人々が言っていることには水火の違いがある。

世間の人々は「日本国では、日蓮一人だけが謗法の者である」と言う。また経文には「（謗法の者は）大地より多いだろう」とある。

法滅尽経には「善者は一人か二人である」とあり、涅槃経には「信ずる者は爪の上の土」とある。

経文のとおりであるなら、日本国では、ただ日蓮一人だけが「爪の上の土」であり、「一人、二人」にあたるのである。そうであるなら、心ある人は、経文を信用すべきだろうか、世間の人々を信用すべきだろうか。